

## 京都の難読漢字の一つ【蹴上<sup>けあげ</sup>】 ～その弐～

前回【蹴上】～その壱～に続き今回は～その弐～をお届けします。

本当にこの周辺には疏水に関する施設が多くて主だったものだけでも紹介するのに何回かかるのか今は想像出来ないのが正直な思いです。

しかも昨年8月27日付けで琵琶湖疏水の24か所が国宝・重要文化財（以降重文と略します）に指定されました。

西洋技術の習得過程にあった明治中期において、当時の土木技術の粋を集めて築かれ、世界的に高い評価を得た、類い稀なる構造物であり、明治日本における都市基盤施設の金字塔である、と高い評価を受けての指定です。

### <文化審議会の答申内容>

琵琶湖の湖水を京都へ疏通し、舟運、灌漑<sup>かんがい</sup>、防火、発電、水道といった多岐の機能を果たす長大な運河の構成施設。西洋技術の習得過程にあった明治中期において、当時の土木技術の粋を集めて築かれ、世界的に高い評価を得た類い希なる構造物であり、明治日本における都市基盤施設の金字塔。自然と人工、伝統と近代の景観が織りなす京都の比類ない風致を育んだ琵琶湖疏水の代表的遺構であり、文化史的意義も極めて深い。また、近代の土木構造物としては、初めての国宝となる。

#### 1 国宝・重要文化財として指定されるもの：琵琶湖疏水施設24か所

##### (1) 国宝 5か所（4所、1基）

近代京都を象徴する、明治日本における都市基盤施設の金字塔

施設名	所在地	施設管理者	建設年
ずいどう 第一隧道	京都市 滋賀県大津市	京都市	明治23年
ずいどう 第二隧道	京都市		明治21年
ずいどう 第三隧道			明治22年
インクライン			明治22年
南禅寺水路閣			明治21年

##### (2) 重要文化財 24か所（16所、4基、4棟）

近代京都の形成に大きく寄与した長大な運河とその関連施設

国宝の5か所に加え、以下の19か所が指定される。

施設名	所在地	施設管理者	建設年		
大津閘門及び堰門	滋賀県大津市	京都市	明治22年		
大津運河			明治20年		
安朱川水路橋	京都市		明治23年		
第一〇号橋			明治37年		
第一一号橋			明治36年		
夷川閘門			明治23年		
ずいどう 第五隧道			明治23年		
ずいどう 第六隧道			明治21年		
ずいどう 日岡隧道			明治45年		
あらいざき 新旧両水連絡洗堰			京都市	明治45年	
ずいどう 合流隧道				明治45年	
蹴上放水所				明治45年	
七瀬川放水所				明治44年	
蹴上浄水場第一高区配水池				明治45年	
旧御所水道大日山水源地 ほんぶしよ 唧筒所				明治45年	
蹴上発電所旧本館				関西電力株式会社	明治45年
夷川発電所本館				大正3年	
伏見発電所本館			大正3年		
本願寺水道水源池	宗教法人真宗大谷派		明治27年		

※ 名称は、竣工当時の記録による（現在の名称と異なるものがある）。

<文化審議会の答申内容>

琵琶湖の湖水を京都へと疏通する長大な運河とその関連施設。舟運、灌漑、防火、発電、水道等の都市近代化に係る多岐にわたる機能を集約した大規模な施設。特に新技術を積極的に導入し、建設当時我が国最長規模を誇った第一隧道は、近代トンネルの規範的存在。明治維新後に衰頹した京都の再興を支えた、京都の近代化を象徴する都市基盤施設。

(3) 附<sup>つ</sup>指定 337点

上記施設に関連する備品や文書などであり、附属的に指定されるもの。以下、所有者は、京都市と個人。

- ・ 水車 1 台、発電機 1 台（水力発電用の機器）
- ・ ヴェンチュリーメーター 5 台（水の流量を計測する機械）
- ・ カンテラ 1 個
- ・ 導火線 1 本（個人所有）
- ・ 関係文書 328 点（一部、個人所有）

上記が国宝・重文に指定される約3か月前に国の文化審議会において、琵琶湖疏水の諸施設を国宝・重要文化財に新たに指定することについて、答申が出された内容を京都市上下水道局が発表した内容の一部です。

(参考1) 国宝・重要文化財に指定される施設の位置



①	第一隧道
②	第二隧道
③	第三隧道
④	インクライン
⑤	南禅寺水路閘
⑥	大津閘門及び堰門
⑦	大津運河
⑧	安朱川水路橋

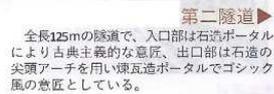
⑨	第一〇号橋
⑩	第一一号橋
⑪	夷川閘門
⑫	第五隧道
⑬	第六隧道
⑭	日岡隧道
⑮	新旧両水連絡洗堰
⑯	合流隧道

⑰	蹴上放水所
⑱	七瀬川放水所
⑲	蹴上浄水場第一高区配水池
⑳	旧御所水道大日山水源地導筒所
㉑	蹴上発電所旧本館
㉒	夷川発電所本館
㉓	伏見発電所本館
㉔	本願寺水道水源池

国宝：①～⑤ 重要文化財：⑥～㉔



**第一隧道**  
大津市域に位置する大津開門及び埋門、大津送河を経て、最も上流のトンネル。全長2,444mと当時日本最長の隧道であったことから、工期短縮のため、トンネル工事としては日本で初めて整坑工法を採用した。



**第二隧道**  
全長125mの隧道で、入口部は石造ポータルにより古典主義的な意匠、出口部は石造の尖頭アーチを用い煉瓦造ポータルでゴシック風の意匠としている。

**第三隧道**  
全長852mの隧道で、出口部分は礮上船溜に注ぐ。入口部は煉瓦と石造のポータルで中世の城郭のようなゴシック風の意匠、出口部は石造ポータルで古典主義風の意匠としている。

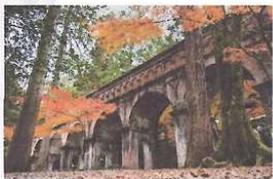
## 国宝に指定される4所、1基

～近代京都を象徴する、明治日本における都市基盤施設の金字塔～



**インクライン**  
上流の礮上船溜と下流の南禅寺船溜を結ぶ全長582m（建設当時世界最長）の傾斜鉄道。約36mの高低差を克服するために船を台車に昇せ、ケーブルカーと同じ原理で運んだ。下部を抜ける隧道部分は煉瓦造、ヴォールトを斜アーチでつくっているため、通称「ねじりまんぼ」と呼ばれている。

**南禅寺水路閣**  
礮上船溜から分岐し東山の山裾を北上する分線が南禅寺境内を通過する箇所にて設けられた、煉瓦造の14連アーチを用いた延長93mの水路橋。赤煉瓦に一部石造の白いラインを付け、上部にはロンバルディア帯を施す意匠が用いられている。



## 重要文化財に指定される施設

～近代京都の形成に大きく寄与した長大な運河とその関連施設～



**大津開門及び埋門**  
琵琶湖湖水に於ける埋門の舟を入れるゲート。両側が開門、北側が埋門となっている。開宰草の主要部分は石で、他は煉瓦で架かっている。

**大津運河**  
大津開門及び埋門と第一船室を繋ぐ運河。延岡工事は、明治19年にオープンカット工法で完成され、その後石積みを実施し、明治20年に完成した。



**安生川水路橋**  
琵琶湖湖水の運河部分が安生川と交差する位置に、川を跨ぐ水辺橋としてつくられた、赤煉瓦をあらわしたアーチ橋。

**第一の舟橋**  
明治37年に建設された、鉄筋コンクリート橋によるアーチ橋。第二隧道入口のやや上流に位置し、山ノ谷橋とも呼ばれる。橋の明面に記された説から、技師・山田忠三の設計と判明している。



**第二の舟橋**  
第三隧道入口のやや上流に位置し、明治36年に建設された。原料する資材としては国内産初級の鉄筋コンクリート製、田舎地味が鉄筋コンクリート造の橋梁の実験体として設計したものとされている。

**礮上開門**  
南禅寺船溜から礮上開門には約3.4mの高差があり、船の運搬を可能とするため、礮上船溜と開門が設けられた。基盤は埋門としては見られ、石造及び煉瓦造の両造りが残存している。

蹴上付近で紹介出来る国宝は、【第三隧道】の出口付近の他、【インクライン】と【南禅寺水路閣】の3か所です。次回以降のこの寄稿文で詳しくご紹介したいと思いますのでご期待くださいませ。(5-6にて予定しています) 続いて重文指定される施設は以下の通りです。



**第五隧道**  
親水分離の南禅寺水塔の下流に設けられた隧道。煉瓦造によって意匠を施した山入口部分を見ることが出来る。

**第六隧道**  
第三隧道の下流に設けられた煉瓦造の隧道。かつては毒生子ダムに抜く山口があったが、取水塔を設計するなどの意匠により、南部分は地中化している。煉瓦造により削られた山入口部分は現在も見ることが出来る。



**日留隧道**  
明治45年に完成した第二取水の一部を構成する隧道。第二取水は大津市の取水口からほぼ全線がトンネルとなっており、日留隧道は礮上船溜に注ぐ。出口は石造及び煉瓦造によって飾られている。

**新旧雨水排水洗淨**  
第二取水の旧開門を礮上で第一取水に合流する地点に設けられた道で、第一取水と第二取水の水位差を調整するため、第一取水完成時である明治45年につくられた。



**合流隧道**  
第一取水と第二取水の合流点である新開門水塔洗淨と礮上放水所とを結ぶ隧道で、第二取水と合わせて設けられた。出入口は石造及び煉瓦造によって装飾されている。

**礮上放水所**  
奇麗な造りから見て水を礮上発電所の発電用排水管に送るため、水位調整を行うための構で、第二取水に合わせて設置された。一定の水位を超えた赤煉瓦は、南禅寺船溜に向けてインクラインの地中管へと流れる。



**七瀬川放水所**  
七瀬川の東側に無造りな形で残る「七瀬川」が七瀬川と交差する地点に設けられた施設。親水の水流を七瀬川に放水するためにつくられた。

**礮上浄水場第一高圧配水池**  
明治45年、第二取水の完成に合わせて赤煉瓦の上水塔が完成した際に建設された。浄水場において、当初の設備を残している。礮上船溜から取水した水は浄水処理の後、場内の低い位置にある同貯水池にポンプアップされ、京都の中心市街地へ配水された。配水池の入口部分には煉瓦造によりゴシック風の上部部分がつけられた。



**旧御所水道大目山水源池御所**  
明治45年、京都御所の汚水用水として建設された御所水道の施設。御所水道は、礮上船溜の第一取水合流点付近から取水し、一段高い大目山浄水場（後に九条山浄水場）まで圧送した後、御所へと送水された。同建物はその圧送を行うポンプ室としてつくられた煉瓦造平屋建の建物で、工部大学校・藤森学校の第一階生で宮内省において重要建築物を手がけた建築家・片山東熊と、医官川匠繁技師の土木第二級の設計による。



**礮上発電所旧本館**  
第二取水の完成に合わせて、明治45年に発電量増強のために改築された。煉瓦造の建物で、内部は大部分が吹抜けの大空間として発電機を設置し、西側突出部分は蓄水池を貯蔵室、蓄水池の取水のための設備室とした。

**奥川発電所本館**  
大正3年に奥川開門の北側に建設された発電所。煉瓦造による発電所本館が現存しており、現在も発電所として稼働している。



**伏見発電所本館（現：豊楽発電所）**  
大正3年に鴨川運河の終点に近い豊楽地区に建設された発電所。発電所の建物は鉄筋コンクリート造でつくられており、現在も発電所として稼働している。

**本願寺水道水源池**  
江戸時代4度におよび火事で焼失した東本願寺では、明治時代の復興に際して、湧き水の設備を計画した。明治30年、礮上で礮上放水所から取水し、市街地を地下管で送水する本願寺水道が建設され、境内には琵琶湖取水の水を利用した貯水槽や放水設備が設けられた。水塔は、琵琶湖取水から取水した水を貯水する施設で、片断石を用いてつくられている。

これら重文施設の中でこの【蹴上】シリーズでご紹介させていただく予定の施設は、  
【日岡隧道】、【新旧両水連絡洗堰】、【合流隧道】及び【蹴上放水所】は1セットとして、5-4  
にて

【旧御所水道大日山水源地唧筒所】と【本願寺水道水源池】は次回5-3にて  
【蹴上発電所日本館】はこの中には入ってはいませんが【蹴上浄水場】と一緒に5-5にて

それぞれ予定しております。

当初はこんななるとは予定していなかったのですが前回以降紹介するに合わせて何度か現地を訪問する度に新しい発見と同時にその真意を確認していくうちに段々と深みにはまってしまい、途中で中途半端な紹介記事にだけはしたくない！と思うようになった次第です。

次回予定の【旧御所水道大日山水源地唧筒所】では設計者の宮内省・宮廷建築家である片山東熊と琵琶湖疏水の工事部長田邊朔郎他疏水事業関係者との意外な接点を、【本願寺水道水源池】では何故本願寺（東本願寺）が寺院単独で疏水から水を4.6kmも配管を埋設する工事を選んだのか？などを中心にお話したいと思います。

特に私個人が明治維新前後に活躍した為政者や名も知らなかった人々の相関関係に興味を持ったことから始まったライフワーク。

紹介することで新たな真実が見つかったりするこのE A H G様の会報に、こうして寄稿文を寄せる機会を与えてくださっていることが私のライフワークを進める大きな原動力になっています。

そしてそうした偶然な出会いが相関図を形成しながら広がっていることを感謝しております。

このご縁を今後も大事にしながら皆さんに一服の安らぎ・郷愁の思いが伝われば幸いです。

DE JH3MKP/岡口 正幸 2026. 3. 3記

今回の画像等は京都市上下水道局様の広報記事およびその中での報道発表資料を使わせていただきました。詳細は同局のHP等から知ることが出来ますので、転載等をご遠慮ください。

そしてこの広報記事の発表後、同年8月27日付け発行の官報において正式に指定されました。

次回以降につきましては私が現地にて撮影した画像をメインに構成したいと思っております。どうぞご期待ください。